公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

探鳥会スタッフ通信　2013年6月号

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目 次

◆安西英明の探鳥会講座・・・・・・・・・・１
◆探鳥会のリスクマネジメント講座
「シリーズ第３回：ウルシのなかま」・・２
◆探鳥会訪問記（奥多摩支部）・・・・・・・５
◆探鳥会保険集計結果（2013年４月分）・７
◆初参加者への対応について、皆さまが気をつけていることをお寄せください・・・・・・９
◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・・９

◆安西英明の探鳥会講座

＜案内人事始め＞

ウトナイ湖サンクチュアリのレンジャー時代、私は地元苫小牧支部の探鳥会をはじめ、北海道内各地で探鳥会のお手伝いをさせていただきましたが、はじまりは40年近く前になります。学生時代に、東京支部の探鳥会リーダー役を引き受けることになりました。その背景には、ある程度、野鳥がわかるようになった頃、探鳥会の後方を歩いた時のショックがあったと思います。

小学生の頃から探鳥会に参加していた私は、常にずうずうしくリーダー役にまとわりついていました。野鳥は見せてもらえるし、解説はおもしろいし、ためになるし・・・ところが、三十人規模の探鳥会だったと思いますが、ある時参加者の後方に位置してみると、鳥は見えないし、聞こえない、リーダー役の解説も聞こえてきません。進行状況もわからず、不安ながらもついていくしかない参加者が何人もいたのです。それまで親切とばかり思っていた探鳥会、素晴らしいと思っていたリーダー役の印象が、私の中でガラガラと崩れてしまいました。

でも、その後、探鳥会に参加して敢えて後の方を歩くようにしてみると、不安でいたたまれない初心者のフォローが自分にできることがわかってきました。お陰で鳥を見る楽しみのほかに、楽しみを共有する楽しみとでも言いましょうか、人に伝える楽しみのようなものを感じることができたのだろうと思います。

＜案内人の心得＞

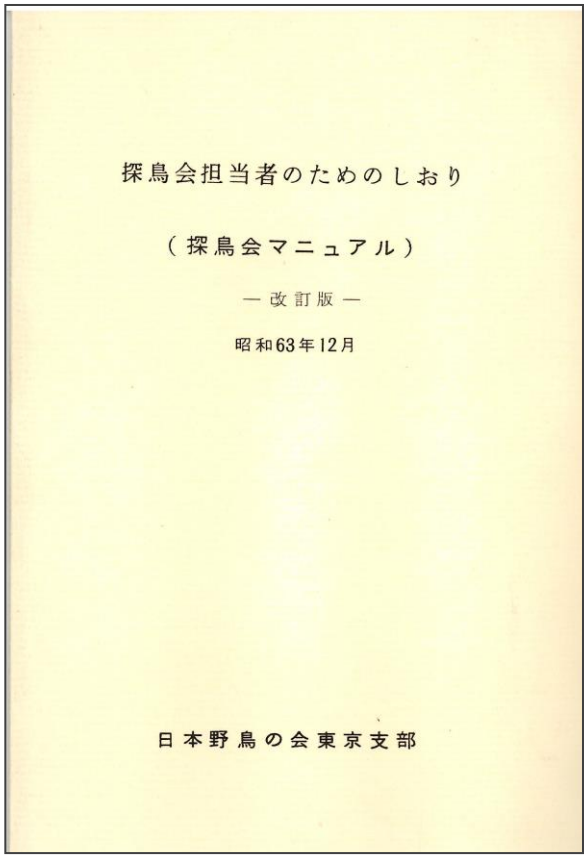
鳥に詳しい人とリーダー役（ここでは、以後、解説を担当する案内人としておきます）はイコールではありません。当会が発行している『野鳥と自然の解説実践ハンドブック』では案内人の心得として「解説よりも原体験」「知識よりも魅力、楽しみ」「経験や技術より親切」「内容やレベルより誠意」などと並べてありますが、それらを導いた私の経験を２つ記しておきましょう。

ある埋立地での探鳥会、過去何回か参加して、自分で野鳥を見分けられるようになった方がいました。その方が後から走ってきて「先ほど、チョウゲンボウがいました」と嬉しそうに報告されました。私は一参加者としてその場に居合わせたのですが、それを聞いた探鳥会の案内人の対応はつれないものでした。

「あぁ、チョウゲンボウですか。ここはよくいるんですよ」。横にいた私は、嬉しそうだった方の表情が悲しみにくれていくのがわかりました。「自分で見つけた」「自分で見分けられた」という喜び、これは誰でも初心者の頃を思い起こせば思い当たると思います。その喜びを受け取ってもらえなかったその方は、２度と探鳥会で出会うことはありませんでした。思い起こせば自分自身でも、探鳥会の進行を考えきりきりしている時などに質問や対応を迫られ、そっけない対応をしてしまったことがあったように思います。当時も案内人は解説役のみならず、全体の進行役や安全管理も含めて一人で担当していました。参加者の気持ちを慮る余裕が

なかったのかも知れません。
　今一つは、これを読んでいるかもしれないのでＹさんとしておきます。ある支部での定例探鳥会、私も一参加者でしたが、そこにＹさんが始めて参加された時のことです。常連の参加者が親切で、望遠鏡をセットしてハシブトガラスを覗かせてくれました。おでこの出っ張りでハシブトと確認できた私は、横にいたＹさんに譲りました。彼は望遠鏡を覗きながら「へぇー、カラスって黒くないんだ」と唸って、そこから彼の野鳥人生がスタートしたのです（今も会員のはずです）。順光だったお陰で、うまく緑や紫の輝きが見られただけのことでしょうが、その一瞬で目覚める人もいるのです。

＜探鳥会のマニュアルを送ってください＞
　前回、探鳥会に関わる方に参考になりそうな過去の野鳥誌などをまとめてみましたが、当会発行の図書としては前述の『野鳥と自然の解説実践ハンドブック』のほか『バードウォッチング案内人の手引き』（1998 年）もありました。今も発行しているものではティーチャーズガイドもあり、当会ホームページで紹介しています。
　http://www.wbsj.org/activity/spread-and-education/teachers-guide/
　前回紹介した探鳥会リーダー通信準備号を読み返していたら、第４号（１９９６年１１月発行）で支部の事例紹介として、埼玉県支部（現日本野鳥の会埼玉）の探鳥会運営の仕組みやすすめ方のマニュアルがありました。今回、改めて事務局にお願いしたところ、2012 年度版を送っていただくことができました。日本野鳥の会東京でも東京支部時代の「探鳥会担当者のためのしおり」があると聞いて、送ってもらいました。普及室では、これら探鳥会スタッフが参考にできる資料を電子データとして共有化するしくみを図ろうと考えています。探鳥会スタッフの育成に役立つマニュアルや報告書等があったら、お送りいただきたく、お願いいたします。


探鳥会担当者のためのしおり

（探鳥会マニュアル）

— 改訂版 —

昭和63年12月

日本野鳥の会東京支部

▲共有化を図る予定の資料の例：日本野鳥の会東京の東京支部時代の「探鳥会担当者のためのしおり」

（普及室/安西英明）

◆探鳥会のリスクマネジメント講座

「シリーズ第３回：ウルシのなかま」
　野外における危険な植物には、食べて中毒を起こすもの、触れて皮膚炎になるもの、花粉症の原因になるものなどがある。このうち、もっとも事故例の多いのが、触れることによって起こる皮膚炎だ。
　なかでも、ウルシのなかまによるアレルギー性皮膚炎は、遅延型接触皮膚炎と呼ばれ、１～２日後に皮膚炎が起る。また、その植物に触れた一部の人だけに発症することも特徴の一つだ。この接触性皮膚炎は、よく「かぶれる」といった言葉で表現される。この「かぶれ」の原因植物の筆頭はツタウルシであり、ヤマウルシやハゼノキによる被害も多い。新葉が出そろった春から夏にかけては、その被害が一段と多くなるので注意しよう。
　探鳥会等の指導者は、フィールドを下見する

などして、ウルシのなかまがないかチェックし、もし存在が確認されれば、出発の前に注意喚起を行うなどの対処が必要である。そのためには、ウルシのなかまの特徴や見分け方、対処方法などを熟知しておく必要がある。

■ツタウルシ

ツタウルシは、ツル性の落葉木で、樹木や岩などに寄りかかるようにして気根を出しては い上がる。葉はだ円形の３枚の小葉からなり、ツタのようにひとつになることはない。ウルシ科の植物で、野生のウルシのなかまの中ではかぶれる毒性分の強さが最も強い。野外でハゼやウルシにかぶれたという人の多くは、このツタウルシにかぶれた可能性が高い。

▲ツタとツタウルシの混生状況；３枚の小葉がツタウルシ

＜ツタとツタウルシの見分け方＞

ツタとツタウルシは、成木の葉を見ると簡単に見分けられるが、ツタの若木の葉はツタウルシのように３枚に分かれることがある。この若木の葉どうしは非常によく似ており、植物にかなり詳しい人でもなかなか見分けがつかない。

３枚の葉を持つ植物がツタかツタウルシか見分けるには、ツルを目でたどってみて同じツルから出ている葉がすべて３枚かどうかを観察するとよい。ツタの場合、必ずといってよいほど２枚や１枚になった葉が見られる。このほか、ツタはブドウのなかまで、落葉時に葉（葉身）の部分だけが落ちて柄（葉柄）がかなり遅くまで残っていることが多い。また、ツタウルシは枝のように中空に突き出すことが多いが、ツタは樹木などにへばりついて中空に突き出すことはない。さらに、ツタウルシなどのウルシ科の植物は、枝や葉を切ると白い液が出てくる。これらのことを頭に入れ総合的に判断すれば見分けることができる。

▲ツタの若葉

▲ツタウルシの若葉

▲ツタウルシの若葉

▲左がツタ、右がツタウルシ；ツタは枝を出さないのに対し、ツタウルシは枝を出してはびこる

▲ツタはブドウの仲間で、秋に葉柄の先端から葉を落とし葉柄だけが残っていることが多い

＜症状は？＞

ウルシのなかまに触れることによってかぶれる接触性皮膚炎の特徴は、一部の人だけに発症することや１～２日後に症状が出ることだ。このため、本人にもその原因が分からないことが多い。毒成分はウルシオールで、顔や首、手、外陰部などにかゆみの強い紅斑を生ずる。

▲ウルシオールで発症した患部

＜対処方法は？＞

かぶれを確認したら、専門医の治療を受ける。ここで重要なことは、何にかぶれたかを確認し、今後に生かすことである。しかし、ふつうの場合そのような努力をあまりせず、野外に出ることを必要以上に恐れてしまう。よくかぶれる人は、皮膚科の専門医に行ってパッチテストという方法で原因植物などをつきとめるとよい。自分のアレルギーの原因物質を知っておけば、対応が容易になる。

■ヤマハゼとヤマウルシ

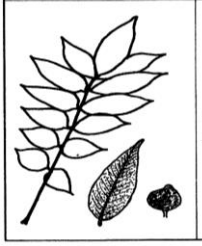
かぶれる木として、ハゼやウルシがあることは多くの人が知識として知っているが、実際にそれらを見分けることのできる人は多くない。島根県内で自然状態でよく見られるこれらのなかまには、ハゼノキ、ヤマハゼ、ヤマウルシの３種がある。

▲ヤマウルシ

▲ハゼノキ

▲ヤマハゼ

ハゼ類３種の見分け方

ヤマハゼ	ハゼノキ	ヤマウルシ
小葉はだ円形または卵状長だ円形、5～7cm、4～7対、小葉の長さにかなりの差がある	小葉は広披針形または狭長だ円形、4～10cm、4～7対、小葉の長さにほとんど差がない	小葉は卵形または長だ円形、6～12cm、6～8対、小葉の長さにかなりの差がある
葉の両面に短毛が密生	葉は両面無毛でやや光沢あり	葉の両面に短毛あり、特に裏面の脈上に多い
裏面は緑白色	裏面は粉白色	裏面は淡緑色
果実は扁球形で黄褐色の光沢あり	果実は扁球形で白い光沢あり	果実は扁球形で黄色な毛を密生
		

（理事長/佐藤仁志）

◆探鳥会訪問記（奥多摩支部）

裏高尾探鳥会

参加日時：2013 年５月 25 日８時 30 分～14 時
天候：曇りのち晴れ
参加者：17 名（リーダー３名、男性８名、女性２名、財団事務所から堀本含む新人４名）

「裏高尾探鳥会」は、奥多摩支部の３つある定例探鳥会の１つで、東京都八王子市にある標高 599 m の山、高尾山で実施されています。高尾山は都心からのアクセスが良く、ケーブルカーなどを使って気軽に登山ができ、さらに 07 年にはミシュランの日本版ガイドブックで三つ星を獲得したこともあり、年間の登山者数は 260 万人超と世界一の登山者数を誇っています。

探鳥会のタイトルについては、同じく高尾山をフィールドにしている他支部への配慮もあり、裏高尾という名前で実施しているそうです。探鳥会は沢沿いの登山道「6 号路」と「稲荷山コース」を使って頂上付近まで登り、見晴らしの良い「紅葉台」で昼食、その後「日陰林道」を下るコースでした。この日は中高年の方を中心に 17 名の参加があり、リーダーは先頭、真ん中、後尾に分かれ、参加者は縦一列に並ぶように歩きました。

▲一列に並び歩く参加者

＜探鳥会の様子と観察した鳥＞

探鳥会が始まる前「高尾山での探鳥会」ということで、一般登山者が多く、道といっても登山道しかなく道幅が狭い上、５月で木には葉が茂っているという、他の探鳥会と比べて鳥を見る上ではハンディがある中で、いったいどのようにして探鳥会を楽しむのだろうと思いました。しかし、裏高尾探鳥会ではそのための工夫がされており、この時期の山での探鳥会でしか味わえないだろう体験をすることができました。

探鳥会はまず、準備体操から始まりました。その後リーダーから、

「他の登山者とすれ違うときは安全な山側に避けてください。」

との指示がありました。登山中も、列が広がると、リーダーを含む支部の方から声掛けがあったり、列が途切れると、後尾のリーダーから前方のリーダーへ声掛けがあったりと、周囲への気配りが徹底されていました。また、休憩が数箇所で設けられており、リーダーからは飴や凍らせていた冷たいゼリーが配られ、安心して楽しく登ることができました。

鳥の姿が見つけにくい分、参加者みんなで鳴き声に耳を澄ましました。鳥の種類と鳴き声を一致させるのは教えていただいても初心者には難しかったですが、夏鳥のきれいな歌声は聞いているだけで心地よく、次第に神経が研ぎ澄まされていくような感覚を覚えました。その中で、クロツグミ、キビタキ、オオルリなどの山地性の鳥の姿を見ることができ、新緑に映えた姿や高らかに囀る姿は感動的でした。

リーダーは植物図鑑も持参しており、鳥と同じかそれ以上に解説をされていました。

「杉の大木に着生しているのがラン科のセッコクです」

と、遠くにある植物でも珍しいものはスコープに入れて見せてくれました。その他、

「シダは同定が難しいですが、リョウメンシダはこのように葉の表と裏が色も形も同じなので簡単です」

「ヤブムラサキはこのように葉がフワフワしていてビロードのようですが、ムラサキシキブはフワフワしていません」

と、実際に見たり触ったりすることを促しながら、説明をされていました。

観察した鳥は、キジバト、ホトトギス、アオゲラ、コゲラ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、サンコウチョウ、エナガ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、イカル、スズメ、カケス、ハ

シブトガラスの 27 種と、外来種のコジュケイ、ガビチョウでした。

＜参加者の声＞

以下は探鳥会に参加しながら雑談の中でお聞きした参加者のお話です。

50 代くらいの男性：「30 年くらい前から高尾山や御岳山に登っていました。最近八王子へ越してきて、周りにたくさんいる生き物について知りたくなり、初めて参加しました。普段平地では見られない鳥が見られて今日は来てよかったです。キビタキがきれいでした。」

50 代くらいの女性：「東京支部に所属しています。裏高尾ということで興味を持ち参加してみました。昨年くらいから、鳥を見るだけでなく、写真に収めたいと思うようになり、望遠カメラを持ってきました。」

50 代くらいの女性：「以前は他の支部にいましたが、奥多摩支部に入りました。裏高尾探鳥会には毎月参加しています。奥多摩支部は、山にたくさん行っており、鳥だけでなく植物の話も聞けるので良いですよ。」

＜まとめ＞

初めての登山探鳥会でしたが、奥多摩支部の皆さまは、山での開催に熟達していることが感じられました。奥多摩支部は中西悟堂先生らによって創設され、定例探鳥会 3 箇所のうち 2 箇所を山で実施、御岳山での探鳥会は昭和 23 年からの歴史があるそうです。山で実施している理由について、リーダーにお聞きしたところ、「発足当初は、山の探鳥会しか無かったと聞いています。推測ですが、平地の探鳥会は東京支部などで出来るので、地の利をいかした山の探鳥会が中心になったのだと思います。また、山が支部エリアを代表するような地形だということもあります。健脚向けの山の探鳥会だけでなく、例えば準定例として家族向きに公園での開催もしており、参加者にあった探鳥会を選択できるようにしています。」とのことでした。今回参加してみて、高尾を始めとした起伏に富んだ地形が奥多摩支部の方たちが普段親しみ、守っていこうとしている自然なのだということが実感できました。

（普及室/堀本理華）

◆探鳥会保険集計結果（2013 年４月分）

４月は６４支部からご報告をいただき、計 251 回の探鳥会が開催され、のべ 5,603 人が参加されました。

表１．４月の探鳥会保険集計結果（2013 年６月 11 日現在）

支部	開催回数（回）	参加者数		スタッフ数（人）	合計人数（人）
		会員（人）	非会員（人）		
小清水	−	−	−	−	−
オホーツク支部	2	23	7	2	32
根室支部	−	−	−	−	−
釧路支部	1	10	22	4	36
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	−	−	−	−	−
旭川支部	4	98	3	5	106
滝川支部	1	17	0	2	19
道北支部	1	0	3	1	4
江別支部	−	−	−	−	−
札幌支部	2	44	30	5	79
小樽支部	1	1	0	1	2
苫小牧支部	−	−	−	−	−
室蘭支部	1	24	20	6	50
函館支部	−	−	−	−	−
道南桧山	1	15	5	3	23
あおもり	−	−	−	−	−
弘前支部	3	25	14	3	42
秋田県支部	3	15	4	3	22
山形県支部	3	27	12	3	42
宮古支部	−	−	−	−	−
もりおか	1	20	8	3	31
北上支部	−	−	−	−	−
宮城県支部	4	63	16	14	93
ふくしま	−	−	−	−	−
郡山支部	1	7	0	3	10
二本松	1	12	0	2	14
白河	1	7	0	1	8
会津支部	−	−	−	−	−
奥会津連合	−	−	−	−	−
いわき支部	0	0	0	0	0
福島県相双支部	−	−	−	−	−
南相馬	−	−	−	−	−
茨城県	10	80	59	13	152
栃木	−	−	−	−	−
群馬	5	74	20	12	106
吾妻	1	10	20	2	32
埼玉	7	209	30	44	283
千葉県	10	82	40	42	164
東京	13	417	16	64	497
奥多摩支部	12	145	23	49	217
神奈川支部	9	134	41	30	205
新潟県	−	−	−	−	−
佐渡支部	−	−	−	−	−

富山	3	52	35	5	92
石川	2	67	7	5	79
福井県	1	30	4	3	37
長野支部	4	66	17	8	91
軽井沢支部	1	18	11	1	30
諏訪	2	24	42	8	74
木曽支部	–	–	–	–	–
伊那谷支部	–	–	–	–	–
甲府支部	1	25	0	2	27
富士山麓支部	0	0	0	0	0
東富士	–	–	–	–	–
沼津支部	4	46	45	6	97
南富士支部	0	0	0	0	0
南伊豆	0	0	0	0	0
静岡支部	–	–	–	–	–
遠江	2	38	5	7	50
愛知県支部	17	137	118	38	293
岐阜	–	–	–	–	–
三重	5	44	14	10	68
奈良支部	3	76	0	6	82
和歌山県支部	1	2	2	2	6
滋賀	5	48	17	10	75
京都支部	9	109	31	14	154
大阪支部	23	522	119	96	737
ひょうご	–	–	–	–	–
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	18	10	3	31
島根県支部	1	2	0	1	3
岡山県支部	6	112	62	19	193
広島県支部	6	57	32	6	95
山口県支部	2	12	3	2	17
香川県支部	2	63	23	3	89
徳島県支部	5	64	9	5	78
高知支部	1	16	8	1	25
愛媛	7	61	42	11	114
北九州	2	30	7	2	39
福岡支部	9	151	22	15	188
筑豊	3	22	6	3	31
筑後支部	5	30	11	8	49
佐賀県支部	2	28	4	2	34
長崎県支部	–	–	–	–	–
熊本県支部	7	101	79	13	193
大分県支部	1	20	2	1	23
宮崎県支部	3	22	3	3	28
鹿児島	5	70	31	11	112
やんばる支部	–	–	–	–	–
石垣島支部	0	0	0	0	0
西表支部	–	–	–	–	–
全国	251	3,742	1,214	647	5,603

備考：-は報告がなかったことを示しています。

（普及室）

◆初参加者への対応について、皆さまが気をつけていることをお寄せください

日本野鳥の会滋賀の利倉尚美様より、探鳥会における初参加者への対応に関して以下のお便りをいただきました。

全国の探鳥会スタッフの皆さま、初参加者への対応について日頃気を付けていることを、ぜひ、tancho-staff@wbsj.org までお寄せください。なお、皆様からいただいた情報は７月号で記事にまとめさせていただきたいと思っております。支部名とお名前を明記の上、７月７日（日）までにお送りください。お待ちしております。

（普及室/堀本理華）

『探鳥会で初参加の方に対して、他支部ではどのように対応されているのかお尋ねさせてください。それを踏まえて今一度、有意義な探鳥会の進めかたを当支部で、考え、実行しようと思っております。

滋賀では初参加者への対応が、担当者ごとに様々で、ただ、コースを歩いて鳥を探して終わるということもあります。これでは、初参加者は「どんな鳥がいたのか」「鳥についての説明がない」など、何の面白味も感じないまま終わってしまいます。参加していただいたお気持ちを大事にして、「また来たい」と思っていただけ、更に入会の動機につながるような探鳥会にしたいと願っています。』

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記の上、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレスを記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。

★編集後記

こちらでは梅雨入りしたものの、晴れの日が続いていましたが、今週はようやく梅雨らしい天気になっています。本号では、読者の探鳥会スタッフの皆さまに、「探鳥会マニュアル」や「探鳥会初参加者への対応で気をつけていること」を送っていただきたいというお願いをさせていただきました。ぜひ皆さまから情報をいただき、双方向型の通信にしていけたらと願ってっています。よろしくお願いします。

（普及室/堀本理華）

日本野鳥の会
探鳥会スタッフ通信　第3号
◆発行
（公財）日本野鳥の会　2013 年6月 14 日
◆担当
普及室　普及教育グループ
〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル
TEL：03-5436-2622
FAX：03-5436-2635
E-mail：tancho-staff@wbsj.org